

光村印刷株式会社創業

1889年(明治22年)には東京に日本初のアマチュア写真倶楽部の「日本寫眞會」(会長:榎本武揚)が誕生し,早速会員となった平村清(「平村写真館」創業者)は翌1890年に神戸沖で行われた神戸で初の海軍観艦式を諏訪山から撮影,手彩色による大型写真を同年,上野で開催された第3回「内国勸業博覧会」に出品し,明治写真界の重鎮・小川一真(かずまさ),日本初のアマチュア写真家・鹿嶋清兵衛の作品とともに絶賛された。(1)

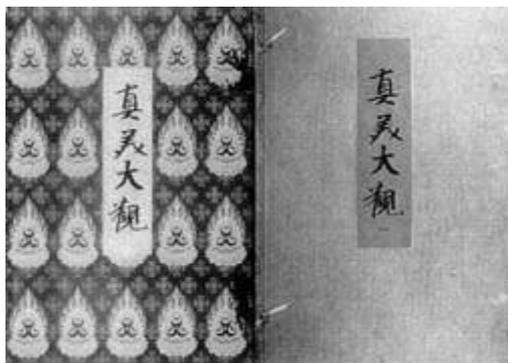
一方,1891年には神戸随一の廻船問屋だった栄町の「長門屋」の長州出身(現在の光市,姓は光井村に由来),西南戦争で莫大な利益を収めた光村弥兵衛が没し,その葬儀を撮影したのは「市田写真館」。その葬儀写真に興味を抱いた一粒種の光村利藻(としも)——妾腹の子として大阪別邸で誕生,神戸本邸に引き取られる(1877-1955)——は即刻居留地の「トムソン商会」から17円50銭の大枚をはたいて輸入カメラを入手,「市田写真館」に持ち込み,市田左右太から直接手ほどきを受ける。(2)

1893年慶応義塾に入学して上京した光村利藻は,宮内省に出入りする小川一真に伝授料200円を支払い,当時最新の「コロタイプ印刷」(写真原理を用いた美術印刷)をマスターし,1901年(明治34年),相続遺産3,000万円を美術印刷につき込み,現「光村印刷株式会社」(本社東京)の基礎「関西写真製版印刷合資会社」を起業した。『原色版印刷の光村』と呼ばれた光村に写真技法を伝授した人として特筆される市田左右太の市田家の養子・市田幸四郎は「市田写真館」内で「市田印刷」を創業,大正中期に日本へ輪転機を用いたオフセット印刷を導入し,『オフセット印刷の市田』と呼ばれ,市田幸四郎の源流として市田左右太の名は日本の印刷史にもその名を残すことになった。市田印刷は後に日清印刷に吸収され,やがて大日本印刷に合流。

一握りの富豪らが写真で「芸術」を窮める時代を迎え,東京・横浜とならび,神戸が日本の写真界をリードすることになったのである。

「日本仏教真美協会」監修『真美大観』の発行

さて,小川一真の質の高い美術品コロタイプ図版が評価され,1899年に日本美術写真に小川一真の最高の印刷技術が駆使された『真美大観』が上梓された。



明治の大出版社・審美書院の『豪華本美術図書』展が京都岡崎にある山崎書店で、2004年2月に開かれた。「京から出版文化の発信」をテーマに1899年から9年かけて出版された、本邦初の美術全集『真美大観』全20冊、1910年(明治43年)完結の『東洋美術大観』全15冊など、明治・大正期に刊行された約100点の豪華美術本が展示された。

1897年、宝物調査の進展とその結果を受けて「古社寺保存法」が制定され、同年末より「特別保護建造物」と「国宝」の指定が行なわれた。こうした動向の中、京都では1894年より臨済・黄檗両宗の機関紙として『禅宗』という雑誌が「禅定窟」から創刊され、第36号・巻頭論文「寺院の美術を世界の公衆に示すべし」に「今日は日本美術の流行時代也」と前置きして、仏教家は大いに美術を利用し、内外人の仏教思想を呼び起こすべきであるということが説かれる。

その具体化として、初めて寺院の宝物を集めた写真集を出版することが提案される。『真美大観』発刊に先立つ1898年8月『京都美術協会雑誌』74号の「雑報」欄に発行元「日本仏教真美協会」発足の記事が掲載され、記事には「伊藤貫宗(協会代表、臨済宗金閣寺長老)、畑道温、北条周篤(嵯峨臨川寺代表)、奥村明堂(東福寺派宗務所詰)、高田自祥、田嶋志一(東福寺派宗務所詰)、爾文荷(同左)、長山虎壑、前田誠節、後藤文宸、宮崎梅芳、柴田元魯」らが発起人となり、禅居庵内に「日本仏教真美協会」を設立し、仏像仏画を撮影して冊子を発行する旨が記され、冊子『真美大観』(この時点ではまだ「真美偉観」と題されていた)刊行の主眼は、美術品の紹介よりむしろ「美術の嗜好を利用して仏教思想を喚起する」ためにあることが明示されている。「古美術品写真集」発行元が禅宗寺院内に置かれたのは、それが布教活動の一環として企画されたためであった。後日の記事に『真美大観』の販売は「日本仏教真美協会」会員への有料頒布という形態をとり、価格は1冊15円50銭、20冊完結を以て210円の予価であったが、これは当時としても「俄か美術家として之を購うの資力あるもの果して幾人かある」と嘆かれるほど高額なものであった。

ところで『真美大観』刊行開始当時の担当者は次の通りである：作品選択：今泉雄作；和文説明：藤井宣正；英文説明：高楠順次郎；同批評的補説：フェノロサ；木版彫刻：森川応翠；同色摺：田村鉄之助；写真製版・印刷：小川一真；編集上全般の整理：田嶋志一。「和文説明」を担当した藤井宣正(1859-1903)は、『大蔵経冠字目録』や『仏教小史』などの著作がある真宗本願寺派の学僧で、「英文説明」の高楠順次郎は、インド学・梵語学・仏教学の大家碩学で、1890年に渡欧遊学を果たし、1897年に帰国している。この間に「観無量寿経」「南海寄帰内法伝」などの英訳があり、1903年東京帝国大学梵語学教授に就任している。作品解説者のこの藤井や高楠のような仏教学者の名前が見られるのも『真美大観』が何よりもまず、仏教の教化を目的として企画されていたことがわかる。第1冊巻頭には、当時美術行政の権威であった九鬼隆一とフェノロサによる序文が載せられているが、フェノロサは序文冒頭に「日本において、東洋の古代美術の精神を觀んと欲せば、京畿地方殊に京都の大寺巨刹においてせざるべからず」と述べている。

仏教関係者にとってみれば、「美術品写真集」はいわば教義の絵解きであり、仏教史の視覚化であった。しかもそれは印刷による大量生産、大量頒布が可能になっていた。日本初の「美術作品集」が、仏教関係者による内外への布教、仏教教化の方策として企画されたことは画期的なことであった。また『真美大観』には当時最高の印刷技術が駆使され、1900年パリ万国博覧会に『真美大観』を出品し、「書籍」部門で金牌を受賞している。⁽³⁾

審美書院の誕生

1902年1月『真美大観』の発行権は神戸の富豪・光村利藻が経営する「関西写真製版印刷合資会社」に移譲された。彼は絵画・刀剣の蒐集家で多くの画家たちのパトロンとして活躍し、またみずからも当時著名な写真家であった。「日本仏教真美協会」は『真美大観』を刊行するためだけに結成された団体であったため、この時点で解散し、光村のもとで新たに「大日本真美会」が創立され、理事長には光村が就任し、理事には雑誌『禅宗』の編集を退いた田嶋志一が就任している。神戸下山手通りに事務所を構え、その滑り出しは順調であった。しかし1904年日露開戦が迫り、会員である予約購読者は次第に減少していった。協議の末、協会の事業を改善拡張し、仏教美術以外の画集も刊行することが計画され、1903年に光村が新たに創設したのが「審美書院」であった。ここからはいわゆる「真善美」の「真美」ではなく、「審美眼」の「審美」の字が用いられるようになる。おそらく光村は仏教美術以外の画集発刊を以て、「真美」の字に残る宗教色・思想色を排除しようという意図があったのである。⁽⁴⁾

以後の「審美書院」は、画家別に作品を編集して『光琳派画集』(1903-1906年)や『元信画集』(1903-1905年)、『若冲名画集』(1904年)などを次々と刊行し、これによって「美術出版社」の令名を馳せることになった。また、海外へも販路を拡大することが計画され、明治30年代以降の審美書院の刊行物には、田嶋志一訳による英文版も出版された。

日露戦争支援外債確保プロパガンダ～米国セントルイス万博参加

1904年(明治37年)にかつてない規模で開催されたセントルイス万国博覧会への日本参加は、日露戦争を背景とした明治政府の英断で、当時、米英からの日本支援と軍資金援助を得るため外債発行を実施した明治政府は、国力を挙げての万博参加を決定した。⁽⁵⁾

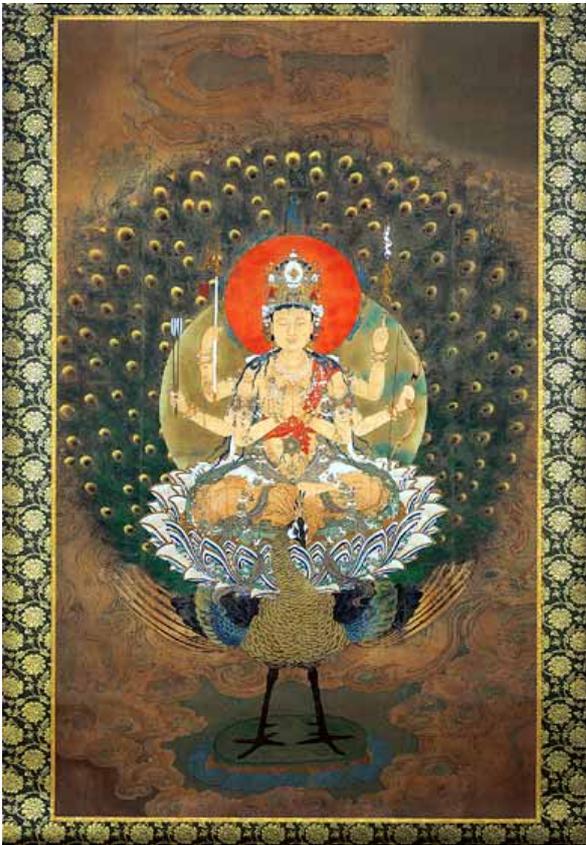
万博での日本会場は、平安・室町・江戸それぞれの時代文化の粋を紹介し、大規模なパビリオンは金閣寺・あずまや・茶室・回遊式の日本庭園・芝居小屋・料亭などで構成された。日本から渡った皇室伏見宮、男爵松平正直をはじめ官民代表、職人、芸術家、芸人など3百人余が、訪れた欧米人賓客をもてなした。日本会場は大盛況を呈し、日本のイメージを大いに高めたのである。



(観覧車から望む日本館と庭園の全景)
Francis, *The Universal Exposition*,
1904, St.Louis, 1913, Vol.2, p.51)



(メリエワルドの広大な別荘地に移築
後の現在の「松楓殿」[万博メイン会場])



(木版画「孔雀明王像」，1904年)

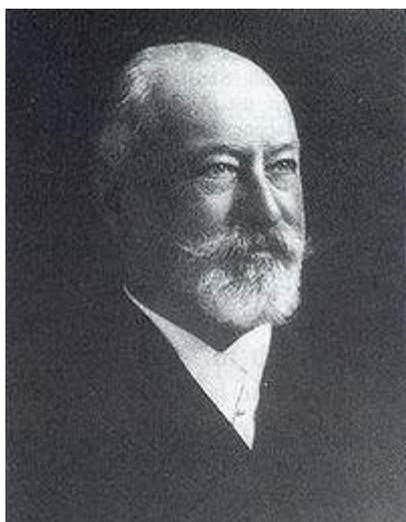
万博開催期間，光村印刷は摺り度数千三百余度，世界最大・最多色の豪華木版画「孔雀明王像」を出品し，名誉金牌を受賞している。⁽⁶⁾

戦費の資金繰りについては，当初英国ロスチャイルド家は牽制したものの，ドイツ・フランクフルトで中近世ゲットー時代同居した縁のあることから，米国在住のヤーコブ・ヒルシュ・シフ(1847-1920)の存在が浮上し，シフから2億ドルの融資が得られて日本は戦勝国となった．同シフは親日派となって，ロシア革命の際，革命戦士に同様に融資し，帝政の転覆を謀った。⁽⁷⁾

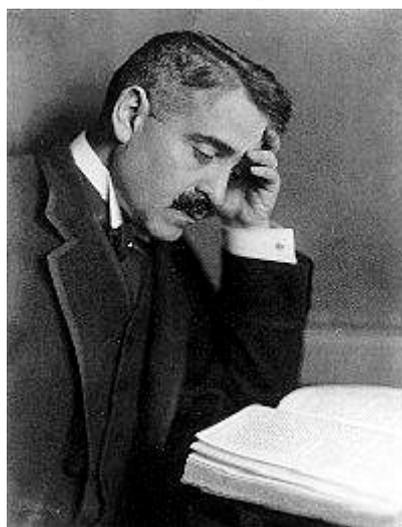
このシフ家の娘フリーダはハンブルクのユダヤ系銀行家ヴァールヴルク家に嫁いでいるが，そのヴァールヴルク家のアブラハム・モーリッツ(1869-1929)は，

16世紀以来の伝統的なキリスト教図像学(イコノグラフィ)を基礎とする究極の学際研究・図像解釈学(イコノロジー)開祖の美術史家として麗名を馳せ、ポッティチェリ作品を通じてルネサンス期の異教の女神たちの細密な描写表現を解析研究している。《神は細部に宿りたもう》はあまりにも有名な語録である。(8)

ただ、ユダヤ家系からか、同様に細密画の精髓を示す《ネーデルランドの作品群》、クエンティン・マセイス作近代風俗画の白眉「両替商とその妻」(1514年、ルーヴル美術館所蔵)やゲントにある聖バーフ大聖堂中央祭壇画ファン・エイク兄弟作「神の羊の礼拝」(1420-32年、背景はポルトガルの田園風景)などを分析対象としなかったのは政治経済的・宗教的理由からであった。欧州中世社会ではキリスト教的価値観が経済活動を嫌い、ユダヤ人は在住容認の見返りに国家規模では財務大臣級職を占めたりするなど広く金融業に携わった。また、キリスト磔刑の責任をユダヤ人に負わせることに起因して、神罰ペストなど疫病蔓延時には、風評被害の格好の的となったのである。



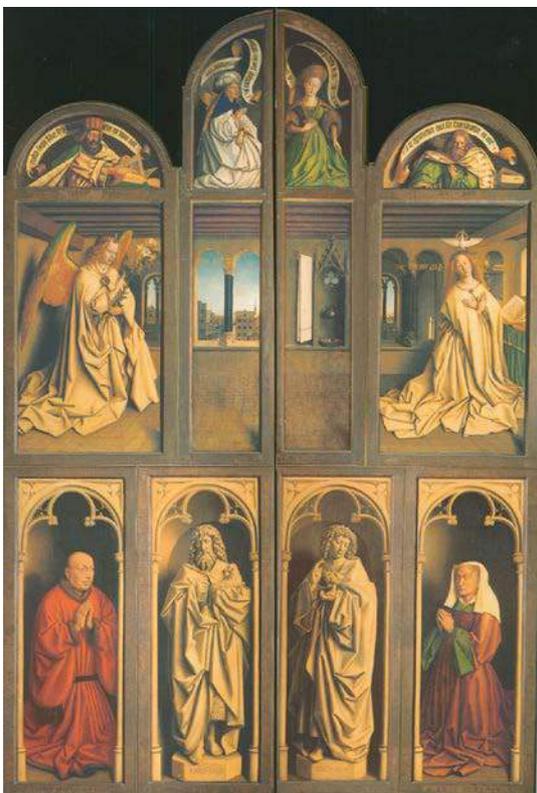
Jacob Hirsch Schiff



Aby Moritz Warburg (c.1900)



クエンティン・マセイス作「両替商とその妻」(1514年、ルーヴル美術館所蔵)



(上:三面祭壇画;左:観音開きを閉じた画面)

ファン・エイク兄弟作「神の羊の礼拝」(聖バーフ大聖堂正面祭壇画, 1420-32年)



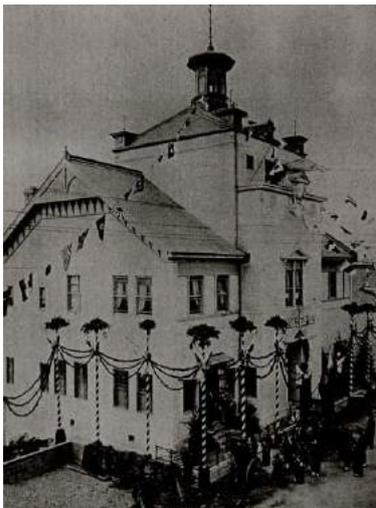
【復刻版】タイムロマン・絵葉書資料館「女性と兎」、関西写真製版印刷合資会社刊行，神戸(東北藝術工科大学・東北文化研究センター所蔵)



増尾信之著『光村利藻伝』1964年より。



(松岡整形外科病院，1970年頃)



(1907年3月5日北浜写真館開館記念写真)

1972年6月まで大阪中之島中央公会堂の対岸にあって、多くの画家の絵の題材にもなっていた美しい洋館。解体されて今はない。もとは光村合資会社(現在の光村印刷株式会社)北浜写真館として建てられたが、1914年(大正3年)東京移転の際、病院に改造された。病院は松岡道治京都医科大学教授が開業した日本最初の整形外科専門病院。

写真館が日本最初の整形外科病院になった経緯について、京大整形外科創立に関する廣谷速人氏調査研究(「日本医史学雑誌」第52巻第3号,2006)によると写真館創設の光村利藻は、趣味の写真が昂じて美術出版業のパイオニアになった人。父親は周防国熊毛郡光井村(現山口県光市)出身、25歳のとき、農業を嫌って村を出、郷里光井にちなんで以後「光村」と名乗り、洋銀相場で財をなし、神戸で実業家として成功している。山陽鉄道会社や大阪商船大学の発起人など、社会事業に多くの寄付をしたほか、廻船問屋を創業して関西と中国・九州の定期航路も就航させている。一方、松岡道治の本家は室積浦(現光市室積)で代々の廻船問屋であり、定期便が寄港していることから、松岡・光村両一族には当時何らかの交流があり、写真館移転と病院開業がほぼ時期的に一致していることから(東京移転が1914年8月、病院開業が翌年4月)、病院開業の折、松岡道治はこの建物の改築を考えていたと推理される。

病院改造は、施設のみならず際立つ意匠への考慮もされている。そのなかで妻側の木組み飾り、正面 2 階の一对の彫刻と櫛型破風が目される。また中央塔部分は写真館当時のままで、初期の擬洋風建築の名残りをとどめる。改造は宮廷建築家片山東熊とともに奈良博物館設計に携わった宗兵蔵があたったといわれている。日本建築学会近畿支部報告「大阪市近代建築調査報告書」(1971.2),p.35 に大阪の代表的な近代建築 60 件をリストアップしてランク付けし、A ランクに日銀大阪支店、中央公会堂、綿業会館などを挙げ、松岡整形外科病院は、和風建築の愛珠幼稚園、松竹座などととも B クラスに選定される。因みに松岡道治の家系は政治と医学に関わる人が多く、外務大臣松岡洋右は本家のいとこであり、首相佐藤栄作夫人・寛子は、別のいとこの娘。この家系は以後、岸・安倍家に繋がることになる。

註:

(1) 武野谷茂夫著「日本写真教育史編年資料集成 1868 年～1925 年」日本大学芸術学部紀要, 1999.

(2) 参考: 光村弥兵衛:

https://hananomichi.at.webry.info/201108/article_1.html

<https://blog.goo.ne.jp/chiku39/e/19adc7eedef2678b201307c4ac5f6db3>

田中真治著「謎多き生涯「市田左右太」神戸写真史の先駆者」神戸新聞, 2018.3.29

<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/201803/0011113196.shtml>

(3) 田嶋志一編『真美大観 第一冊』日本佛教真美協会, 1899 年:

<https://ja.wikisource.org/wiki/%E7%9C%9F%E7%BE%8E%E5%A4%A7%E8%A6%B3/%E5%87%A1%E4%BE%8B>

参考:

http://nakano.jimbou.net/catalog/geta_themes.php/gtID/18

(4) 宗教色に限定されない実例:

「君の審美眼も存外慥(たしか)かも知れん」夏目漱石著『吾輩は猫である』(1905-1906)

「さう云ふ国柄だから、どうしたつて材料の寡すくない大きな眼に対する審美眼が発達しやうがない」同『三四郎』(1909)

(5) 参考: 米国セントルイス万博:

<https://www.bie-paris.org/site/en/1904-saint-louis>

<http://www.aplink.co.jp/ep/4-902454-51-2.html>

楠元町子「万国博覧会と中国—1904 年セントルイス万博を中心に」愛知淑徳大学論集(現代社会学部・現代社会学研究科篇), 第 10 号, 2005 年.

同「国際関係史から見た万国博覧会—1904 年セントルイス万国博覧会を中心に」法政論叢, 第 43 卷・第 2 号, 2007 年.

同「万国博覧会の展示と世界観の形成—1904 年セントルイス万博を中心に」日本生涯教育学会論集, 第 28 号, 2007 年.

(6) NPO 法人・高峰譲吉博士研究会編「セントルイス万博と松楓殿」:

<http://www.npo-takamine.org/info/63.html>

<http://www.npo-takamine.org/contribution/03.html>

(7) ラビ・M・トケイヤー著, 加瀬英明訳『ユダヤ製国家 日本』徳間書店, 2006 年.

(8) アビ・ヴァールブルク著『異教的ルネサンス』進藤英樹訳, ちくま学芸文庫, 2004 年.

エルンスト・ゴンブリッチ『アビ・ヴァールブルク伝 ある知的生涯』鈴木杜幾子訳, 晶文社, 1986 年.

<https://hiromihiromi.sakura.ne.jp/01/?p=1784>